

わたしの 効果倍増! 教材活用術

「漢字サッカー」で、漢字力のパスをつなぎ プレゼン能力アップ！ ゴールをめざそう

横浜市立恩田小学校教諭 宮下章

1. 私の思い描く漢字指導

私が行っている漢字指導は、「予習」を基本としています。指導の方針によっては、授業で初めて新しい漢字に接する方法もあるでしょう。しかし、学年が進み、ある程度漢字の学習に慣れてきた子どもたちは、予習によってさらに学習が深まる素地ができています。したがって、学習の深化という面からも、予習を前提とするやり方があってよいと思うのです。

「予習を基本とする」指導は、最近注目を集めている「反転授業」の発想にも共通すると思います。近年、予習を基本に、家庭で内容をおさえ、学校でコミュニケーションをとりながら探究活動をする「反転授業」の試みが各地で始まっています。ICT環境の発達や時代の変化により、これからの学習や教育のスタイルは大きく変わっていくでしょう。そのような点からも、私は、予習を基本とする学習の可能性を探りたいと考えています。あまりイメージがわからないかもしれませんが

が、予習を前提にする学習指導は、やろうとすれば1年生から可能です。低学年で行う場合は、「漢字の世界っておもしろいな」と思わせるのが大事だと思います。

2. 毎週金曜日は「漢字サッカー」の時間!!

私のクラスでは、毎週金曜日に「漢字サッカー」の時間を設け、新出漢字を10字学習しています。その手順を説明します。

①予習を課す（1週間前）

前の週の金曜日、次の漢字サッカーの時間の「発表担当」として、新出漢字10字の予習を、出席番号順に一人一単語ずつ割り当てます。

10名には、指定された単語について、「単語とその読み方」「意味」「書き順」「その他自分で調べたこと」を書いてくるように指示した文書と記入用紙4枚を渡します。

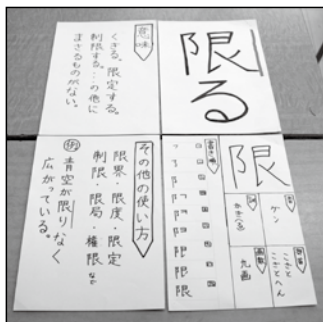
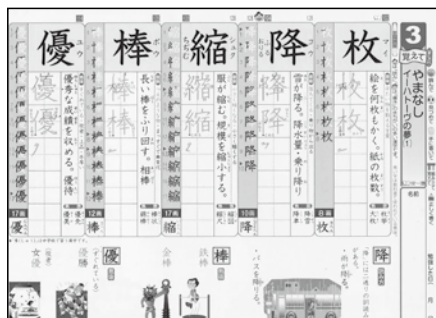
予習は、次の週までならいつでもやってよいことにしています。この流れにぴったり合っているのが新学社の「まんてんスキル漢字」

です。教科書の巻末や「まんてんスキル漢字」にまとめている内容、辞書などを利用して完成させます。

他の子どもに対しても、学級通信で今回の「漢字サッカー」で出す漢字を伝えます。これは、家庭での予習を促す意味もあります。

漢字課題(のうこう)	1枚目 漢字(ごまか)を大きく書く。	2枚目 意味を書く。	3枚目 書き順を書く。	4枚目 その紙の使い方を紹介したり、文作りをしたりする。
------------	-----------------------	---------------	----------------	---------------------------------

▲次の週までにやってくることの指示が書かれた、短冊状の文書です。発表用の4枚の用紙と一緒に、担当の子どもに渡します。



▲「漢字サッカー」の時間までの1週間の間に、割り当てられた単語(漢字)のことを調べて4枚の紙にまとめます。

▶新学社「まんてんスキル漢字」の補足解説(コラム)は、子どもたちが漢字を調べる時に役立ちます。また、読み替えの文例が書かれているのもポイントです。

②ウォーミングアップ(当日)

いよいよ「漢字サッカー」の時間。最初は、10名の子どもたちが書いてきた4枚の紙を、「単語(裏に読み方)」「意味」「書き順」「その他自分で調べたこと」と上から順に、黒板

日々の授業で使う教材や教具。

隣のクラスや隣の学校のあの先生は、一体どんな使い方をしているのでしょうか？

このコーナーでは、気になる教材活用術を紹介します。

に貼っていきます。

その間、他の子どもたちは「まんてんスキル漢字」で、その10字の漢字の学習を始めます。終わったら、漢字学習ノートや教室で用意しているメモ用紙を持ってきて練習したり、問題の出し合いをやったりします。この時使ったメモ用紙は、各自、後で漢字学習ノートに貼っておきます。

10名×各4枚、計40枚を貼り終えたところに、次の週の担当の子どもたちに指示文書と記入用紙を渡します。また、この間に、子どもたちが事前に提出していた漢字学習ノートを見て、書き順や文字が間違っている子どもに指導します。

③漢字プレゼン

「まんてんスキル漢字」を使った漢字学習がひと通り終わり、学習が漢字学習ノートに移ってきたころ、黒板前に全員集合します。ここで、黒板に貼り終えた紙を前に、子どもたちが調べた漢字について一人につき1分半プレゼンします。

10人の発表が終わったら、その発表について、私がアイデアや努力を評価します。何回かやっけていくうちに、子どもたちも評価ポイントがわかってくるので、時には子どもたちに「今日のMVP」を決めさせることもあり

ます。最後に私が、漢字の成り立ちなどについていくつかポイントを絞って解説をします。解

説の内容は、日本の漢字研究の大家、白川静さんの著書などを参考にしています。



▲子どもたちの発表内容は実に様々。漢字クイズをしたり、漢字にまつわる寸劇を演じたりと、各自工夫しながら、学習したことを伝えます。

④いよいよテスト、「漢字サッカー」！

黒板に貼った4種類の用紙のうち「単語」以外の紙を外し、「漢字サッカー」のプリントを配ります。テスト時間は4分間。開始と同時に「単語」の用紙を裏返し、「読み方」を表向きにします。

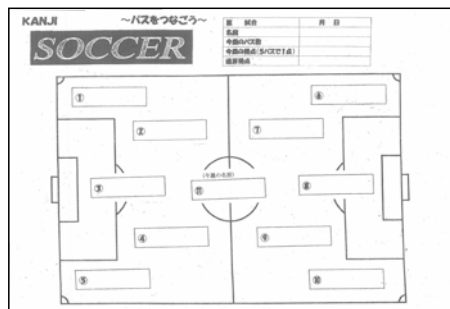
どうしてテストの開始前に「読み方」を表にしておかないのかというと、子どもがなるべく点数を取れるようにするためです。漢字が苦手な子どももたくさんいるので、「おまけ」的な要素を残しています。

4分後、タイマーが鳴ります。鳴り終わるまでの30秒間、子どもたちはラストスパートをかけます！



▶タイマーにもひと工夫。とがった音ではなく、柔らかな電子音のするものを探しました。(TANITA「びびよタイマー 100分計 (ひよこ) 5365」)

▼「漢字サッカー」のプリント。早く終わった子は、解答欄の外に書き込みをします。書き込みがすばらしかったプリントや合格者の名前は学級通信に掲載します。



⑤採点

終わったら、子どもたちに丸つけをさせて回収します。自己採点では×はつけず、正解に○をつけます。10点で合格です。

さて、ここでなぜ、「漢字サッカー」という名前がついているのかを説明しましょう。

サッカーコートを模した問題用紙の真ん中には、「11問目」の欄が書かれています。この11問目には、くじを引き、そのとき出てきた出席番号の子どもの名前を書きます。これが問題です。その子の名前が漢字でもひらがなでも、条件は一緒です。合格は10点なので、9点取れている場合は、仲間の名前を書ければ、プラス1点で「合格」というわけです。

このような流れにしたがって毎週10字ずつ漢字学習を進めていくと、11月くらいには年

間分の漢字の学習が終わります。その後は学年末まで、付録のCD-ROMに収録されている50問の「まとめテスト」を繰り返し実施して、さらにブラッシュアップをはかっています。

3. 「漢字サッカー」の時間もたらし子どもたちの「変化」と「成長」

「漢字サッカー」の時間は、漢字の学習でありながらも発表の時間が設けられていることから、表現力の学習にもなっています。その効果は、他の教科の学習にもはつきりと表れていきます。

例えば「総合的な学習の時間」で調べたことを発表する時、立ち方、声の出し方、資料の扱い方などは、改めて指導しなくてもしっかりと体得できています。

「漢字サッカー」の発表の時間、私は、子どもたちのつま先の向きなども細かく指導しません。「そこまでしなくても」と思われるかもしれませんが、このような指導をしていくと、自分の体のコントロール力や、学習に取り組む際のスイッチのオン・オフが、だんだんとできていくのです。また、工夫して説明することや、仲間の発表を聞いて他の人の良さを見つけようとする意識も育ちます。このように、他の教科にも共通する基本的な学習姿勢が養われていきます。

さらに教師が、「こんな工夫がよかったね」「自

分の考えを加えて発表していたね」他の人の意見を思い切つてつなげたところがよかったよ」など、学習が深まったことに対して評価をすることで、学習への意識が高まり、どんなレベルが上がっていきます。学年の終わりにには、姿勢や声の出し方など、基本的なレベルの指導をすることはほとんどなくなるほどです。

4. 指導のポイント

まず、毎週金曜日この時間に必ず漢字テストがあるという「リズム」をつくるのが大切です。曜日を固定することで、教師にも子どもにも、学習のリズムができます。付け加えるなら、回収したプリントを、土日に余裕をもって確認できます。

また、段取りよくすることも重要です。プリントを用意したり渡したりする時間をいちいち設けるのではなく、時間の流れの中に組み込むこと。そうしないと、子どもたちが落ち着きません。ある程度の経験、マネジメント力が必要となるでしょう。

予習を基本にした指導では、授業中、子どもたちの話し合いや発表に時間を使うことができます。その結果、教師に、子どもたちの様子を見るゆとりが生まれます。また、子どもたちにも、仲間の説明を集中して聞く姿勢が身につきます。

仲間の声や仲間の文字、表現方法にふれる

ことは、子どもたちにとっても新鮮味があつて、よい時間になるでしょう。

5. 最後に

私たち教師の仕事は、子どもたちを変化・成長させていくことだと思っています。

子どもは、見ていてかわいい存在であることはもちろんですが、それよりも私は、「今までできなかったことができるようになった」「新しいところに一歩踏み込んだ」というように、変化・成長する子どもを見ることが大好きです。子どもが変化し、成長する場に立ち会えることが、教師としての私の活力になります。

そのためには、ほめることが大切。「前より頑張ったな」とか「新しいアイデアを披露しているな」、「仲間の意見をちゃんと聞いていたな」というところを逃さずにほめる。姿勢や言葉遣い、授業態度など、学校生活のあらゆる場面でよいものを見せた子どもをほめてあげることが、いちばん大事だと思います。

そうは言っても、子どもは、失敗したりトラブルを起こしたりするものです。しかし、そこで事実だけを見て責めるのではなく、次を目指して努力をしている姿を評価してあげたい。失敗しても、マイナスを克服しようとして立ち上がる瞬間こそが、今後の人生で力になっていきます。その場面を逃さず認めてあげることが、教師の仕事の醍醐味のひとつだと思います。